

井筒

世阿弥作

前

ワキ 旅僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 紀有常の娘

地は 大和

季は 秋

ワキ詞

「是は諸国一見の僧にて候。我此程は南都七堂に参りて候。又是より初瀬に参らばやと存じ候。是なる寺を人に尋ねて候へば。在原寺とかや申し候ふ程に。立ちより一見せばやと思ひ候。さては此在原寺は。いにしへ業平紀の有常の息女。夫婦住み給ひし石上なるべし。風ふけば沖つ白浪たつた山と詠じけんも。此所にての事なるべし。

歌

「昔がたりの跡とへば。其業平の友とせし。紀の有常の常なき世。妹脊をかけて弔はん。く。く。

シテ次第

「暁ごとの閑伽の水。く。月も心や澄ますらん。

サシ

「さなきだに物の淋しき秋の夜の。人目まれなる古寺の。庭の松風更け過ぎて。月もかたぶく軒端の草。わすれて過ぎし古へを。忍ぶ顔にていつまでか。待つ事なくてながらへん。げに何事も思ひ出の。人には残る世の中かな。

下歌

「唯いつとなく一筋に。頼む仏の御手の糸。道びき

給へ法の声。

上歌

「迷ひをも。照らさせ給ふ御誓ひ。く。げにもと
見えて有明の。ゆくへは西の山なれど。ながめは
四方の秋の空。松の声のみ聞ゆれども。嵐はいづ
くとも。定めなき世の夢心。何の音にか覚めてま
し。く。

ワキ詞

「我此寺にやすらひ心を澄ますをりふし。いとなま
めける女性。庭の板井を結び上げ花水とし。是な

る塚に回向の気色見え給ふは。いかなる人にてま
しますぞ。

シテ詞

「是は此あたりに住む者なり。此寺の本願在原の業
平は。世に名を留めし人なり。されば其跡のしる
しも是なる塚の陰やらん。妾も委しくは知らず候
へども。花水を手向け御跡を弔ひ参らせ候。

ワキ

「げにく業平の御事は。世に名を留めし人なりさ
りながら。今は遙に遠き世の。昔がたりの跡なる

を。しかも女性の御身として。かやうに弔ひ給ふ事。其在原の業平に。いかさま故ある御身やらん。シテ「故ある身かと問はせ給ふ。其業平は其時だにも。昔男といはれし身の。ましてや今は遠き世に。故もゆかりもあるべからず。

ワキ「もつとも仰せはさる事なれども。こゝは昔の旧跡にて。

シテ「主こそ遠く業平の。

ワキ「あとは残りてさすがにいますだ。

シテ「聞えは朽ちぬ世語を。

ワキ「語れば今も。

シテ「昔男の。

地「名ばかりは。在原寺の跡旧りて。く。松も老いたる塚の草。是こそ、れよ亡き跡の。一村ず、きの穂に出づるは。いつの名残なるらん。草茫々として。露深々と古塚の。まことなるかな古への。

跡なつかしきけしきかな。く。

ワキ詞 「猶々業平の御事くはしく御物語り候へ。

地クリ 「むかし在原の中將。年経てこゝに石の上。ふりに
し里も花の春。月の秋とて住み給ひしに。

シテサシ 「其頃は紀の有常が娘とちぎり。妹脊の心あさから
ざりしに。

地 「又河内の国高安の里に。知る人ありて二道に。忍
びて通ひ給ひしに。

シテ 「風ふけば沖つ白波立田山。

地 「夜半にや君がひとり行くらんと。おぼつか波の夜
の道。ゆくへを思ふ心遂げて。よその契りはかれ
ぐなり。

シテ 「げに情知るうたかたの。

地 「あはれを述べしも理なり。

クセ 「むかし此国に。住む人の有りけるが。宿をならべ
て門の前。井筒によりてうなる子の。友達かたら

ひて。互に影を水鏡。面をならべ袖を懸け。心の水も底ひなく。うつる月日も重なりて。おとなしく恥ぢがはしく。たがひに今はなりにけり。其後彼まめ男。言葉の露の玉章の。心の花も色そひて。

シテ「筒井筒。井筒に懸けしまろが丈。

地「生ひにけらしな妹見ざる間にと。よみておくりける程に。其時女もくらべこし。振分髪も肩過ぎぬ。君ならずして誰かあぐべきと。互によみし故なれ

や。筒井筒の女とも。聞えしは有常が。娘のふるき名なるべし。

ロンギ地

「げにや旧りにし物語。聞けば妙なる有様の。あやしや名のりおはしませ。

シテ

「誠は我は恋衣。紀の有常が娘とも。いさ白波の立田山。夜半にまぎれて来りたり。

地

「ふしぎやさては立田山。色にぞ出づるもみぢ葉の。

シテ

「紀の有常が娘とも。

地 「又は井筒の女とも。

シテ 「はづかしながら我なりと。

地 「いふや注連縄の長き世を。契りし年は筒井筒。井

筒の陰に隠れけり。く。 (中入)

ワキ歌

「更けゆくや。在原寺の夜の月。く。昔を返す衣

手に。夢待ちそへて仮枕。苔の庭に臥しにけり。

く。

後シテ

「あだなりと名にこそ立てれ桜花。年に稀なる人も

待ちけり。かやうによみしも我なれば。人待つ女

ともいはれしなり。我筒井筒の昔より。真弓櫛弓

年を経て。今は亡き世に業平の。形見の直衣身に

触れて。はづかしや昔男に移舞。

地

「雪をめぐらす花の袖。 (序の舞)

シテワカ

「こゝに来て。昔ぞかへす在原の。

地

「寺井に澄める月ぞさやけき。月ぞさやけき。

シテ

「月やあらぬ。春や昔と詠めしも。いつの頃ぞや筒

井筒。

地「つゝるづゝ。井筒にかけし。

シテ「まろがたけ。

地「おひにけらしな。

シテ「おひにけるぞや。

地「さながら見々えし昔男の。冠直衣は女とも見えず。

男なりけり業平の面影。

シテ「見ればなつかしや。

地「我ながらなつかしや。亡婦魄霊の姿は。しぼめる

花の色なうて。にほひ残りて在原の。寺の鐘もほ

のぐと。明くれば古寺の。松風や芭蕉葉の。夢

も破れて覚めにけり。夢は破れ明けにけり。